

「ふくしまの未来をひらく読書の力 プロジェクト」

読書活動支援者育成事業 地区別研修 主催：福島県教育委員会

県北地区



読書活動支援者育成事業研修会

目的：学校や図書館で活躍する読書ボランティアの専門的な知識や技術の向上を図る。

実施日：令和2年12月6日（日） 場所：福島県自治会館 参加者：58名

行政説明

10:30～10:40

「第四次福島県子ども読書活動推進計画」について

福島県教育庁県北教育事務所 齋藤 麻紀子

(1) 計画策定の背景

① 国の動向

- 平成13年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定され、4月23日が「子ども読書の日」と定められた。また、平成14年には、「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」が策定された。
- 第5次「学校図書館図書整備等5か年計画」が確定し、平成29年からの5か年で学校図書館の図書標準の達成を目指すとともに、学校司書の配置拡充に向けて取り組んでいる。

② 県の動向

- 平成16年に「福島県子ども読書活動推進計画」が策定された。令和2年2月に第四次計画が策定されている。

③ 社会情勢の変化

- 新学習指導要領の全面实施 → 児童の自主的・自発的な読書活動の充実を図る。
- 図書館法、学校図書館法の改正 → 学校司書の法的な位置付けがなされた。
- 情報通信手段の普及・多様化 → 特に、中学生・高校生のスマホ専用率が高い。

(2) 第三次計画の進捗状況について（成果と課題）

① 成果

- 多様な読書活動に取り組んでいる学校の割合が増加している。
- 本を1か月に1冊以上読んだ児童生徒の割合が増加し、小学校では約98%、中学校では約85%である。
- 読書ボランティアが参画している学校図書館の割合が小学校で8割を超えている。

② 課題

- 市町村における子ども読書活動推進計画について、すべての市町村が策定しているが、二次以降の改定率が約40%にとどまっている。改訂に向けての取組が必要である。
- 学年が上がるに連れて不読率が高まっている。自主的・自発的な読書活動を促す取り組みを行うことが大切である。また、生涯にわたる読書習慣を身につけるためには、保護者の読書への理解が必要である。今後、各学校、図書館、読書ボランティア団体等で、子どもの発達段階に応じた切れ目のない特色ある読書活動推進の取組を行う必要がある。

- ・ 特に小・中学校へ学校司書の配置を促進していく必要がある。

(3) 第四次計画の基本方針と具体的な取組

- ① 基本方針1 「子どもが読書に親しむ機会の充実のために」
 - ・ 子どもの発達段階に応じた読書活動の推進
 - ・ 学校等における子どもの読書活動の推進
 - ・ 家庭における子どもの読書活動の推進
 - ・ 地域における子どもの読書活動の推進
 - ・ 支援を必要とする子どもの読書活動の推進
- ② 基本方針2 「子どもの読書環境の整備と充実のために」
 - ・ 図書館の整備・充実
 - ・ 学校図書館等の整備・充実
 - ・ 連携・協力体制の構築（市町村との連携強化）
- ③ 基本方針3 「子どもの読書活動についての理解の促進のために」
 - ・ 推進のための普及や啓発
 - ・ 子どもの読書活動に関する情報の収集や提供
 - ・ 優れた取組の奨励と優良図書等の普及

(4) 計画の推進・進行管理

- ① 今後、県民のニーズと子どもの読書活動の振興施策の展開状況、第6次福島県総合教育計画等との整合性を図りながら、基本方針の具体的な事業施策を推進していく。
- ② 「福島県子ども読書活動推進会議」で各施策や事業の評価を行い、評価結果を公表する。
- ③ 県民のニーズや計画の進捗等の実態把握・見直しを行う。



【参加者からの声】

- 「子ども読書活動推進計画」は、ぜひ長期にわたって続けていただきたいです。子どもへの読書に関する支援は、「収穫時期の見えない、継続する種まき」だと思います。現場でふと空しさを感じ、力不足にさいなまれることもありますが、どうか行政の取り組みとして続けていただけるとお願いいたします。
- 子ども読書活動推進計画の概要等を再確認できました。今後の取り組みの指針にさせていただきます。
- 行政説明の中で、発達段階に応じた読書活動の推進に関して、福島は先進的な取り組みをしていることをお聞きしました。全国から見ても、そのくらい力を入れて読書活動の推進を行っていることを知り、その福島の中で読書ボランティアをすることができて、うれしく思いました。

事例発表①

10:50~11:15

「子どもが足を運びたくなる魅力ある図書館」を目指して

発表者：伊達市立梁川小学校 学校司書

松浦 良子 氏

(1) これまでの取り組み

① 本校の現状について

- 令和2年度の児童数は510名である。
- 平成27年度に仮設校舎から新校舎に移転し、学校司書が配置された。同年に、福島県学校図書館協議会伊達大会・県大会の研究協力校となった。
- 平成29年度に梁川方部の5つの小学校と統合した。同年、福島県学校図書館活性化実践事業研究協力校となった。



② 過去6年間の状況（貸出総冊数）

- 仮設校舎の時（平成26年）は400冊にも満たなかったが、平成27年度には11,392冊の貸出があった。その後も貸出総冊数は増加し、平成29年度には23,469冊となった。これは、児童一人が1年間に40冊以上借りている計算になる。

③ 足を運びたくなる図書館にするための取り組み

- 明るく楽しい雰囲気作り・・・季節や行事等に合わせた掲示
子どもたちの目を引くポップ作り
- 多読称賛・・・・・・・・・・・・・「読了証」の贈呈と図書館通信での紹介
(各学年のブックリストの本を全部読んだ児童が対象)
学校の図書ボランティアが作ったしおりのプレゼント
- 朝の図書館の様子・・・・・・・・・・・・・行列ができるほどたくさんの児童が利用
(高学年児童が多い。)
- 図書ボランティアの活動・・・・・・・・・・朝の読書タイムの時間での読み聞かせ
(毎学期各学級ごとに実施)

(2) 「学習センター」機能の充実

① 展示

- 教科書に紹介されている本・・・・・・・・内容の紹介を添えた展示
- 新聞を活用して情報を展示・・・・・・・・読書スペースに「新聞コーナー」を設置
(例) ノーベル賞受賞・・・・・・・・歴代の受賞者の紹介
関連書籍の展示
- 各教科に関連した掲示・・・・・・・・百人一首(4年国語) 故事成語クイズ(3年国語)
自動車クイズ(1年国語)

② 授業支援

- あらかじめ担任の要望を聞いて、授業で使用する関連図書の準備などを行う。
- 授業に関連したレファレンス機能の充実

→「過去3年間の教師用貸出冊数」

令和元年度は587冊、令和2年度は1,539冊。1学期だけで令和元年度の冊数の3倍になった。

- 国語科の授業支援
 - ア 説明文・物語文の学習
 - 言語活動に関連した資料のレファレンス
伊達市立図書館との連携と団体貸出の利用（学校に収蔵されていない図書の利用）
 - イ 説明文の学習 → 担任からの要望に合わせた資料の収集
 - ウ 物語文の授業 → 並行読書をするために必要な本の種類と冊数の確保
- 社会科の事業支援（例） 5年社会科「工業生産と工業地域」
 - 子どもたちの授業や実際の学習活動と関連付けた年鑑の活用
- 学校司書との連携を図った授業
 - ア 情報活用力を高めるための授業（例）5年国語科「和の文化の説明会を開こう」
 - レファレンス機能を活用した調べ活動と、百科辞典の索引や目次の使い方の説明
 - イ 資料から必要な情報を読み取るために、学校司書がT.Tとして参加
 - 「まとめるカード（要約）」「そのままカード（引用）」を活用と必要な情報を収集する方法の指導

（3） 読書活動年間指導計画を主軸として

学校司書として、学力向上と子どもたちの心の成長のためのお手伝いをしたいと考えている。そのためには、年間指導計画を拠り所として活動することが大切だと考えている。

① 図書館オリエンテーション

- 学校司書とクラスごとの日程を調整し、全クラス対象に実施している。
- 国語の教科書に準じて、全学年で身につけてほしいことや簡単なクイズなどを中心に、図書館の使い方などのオリエンテーションを行った。

② 読書活動年間指導計画の活用

- 学年ごとに作成している。教室に掲示し、各教科等との関連を確認したり、レファレンスの時期を確認したりして図書館の活用を図るようにしている。
- 司書教諭が中心となって作成しているが、学校司書も年間の計画立案に参加している。

（4） 今後の取り組みについて

- 新しい教科書に対応した図書とレファレンスの充実を図る。特に国語の教科書が東京書籍から光村図書に変わるため、関連図書を少しずつ揃えている。
- 社会科、総合的な学習の時間における地域資料の充実を図る。子どもたちの求めに応じた資料収集に努めている。
- 「学習・情報センターとしての機能の充実」を図る。授業等での要望や活用に応えられる資料の収集に努めていきたい。
- デジタルコンテンツと図書館資料の効果的な活用方法を考える。今後、データの信頼を求められる時代となるだろう。学校図書館として、紙ベースの資料を有効に活用できるようにしていきたい。

【参加者からの声】

- 小学校の事例発表は、大変分かりやすく、実際に子どもたちの役に立っている活動の様子がよく分かりました。年間の学習や児童との直接のふれあいの中で、その都度必要なことを読み取り、対応なさっていると大いに共感し、憧れを持ちました。
- 梁川小の事例発表にあった読書活動年間計画はとても興味深いです。
- 自分が小・中・高の時、図書館は殺風景だったような気がします。先生の努力で、子どもたちにとって楽しい図書館、魅力的な図書館になっているのだと感じました。

事例発表②

11:25~11:50

「心育てのお手伝い」

発表者：サークルおはなしおかあさん（伊達市霊山地区）

阿久津智子氏 大友靖子氏 渡辺忍氏 丹治純子氏

(1) 活動の概要（阿久津さん）

- 4名のメンバーで、伊達市霊山地区の保育所や児童館、小学校などを中心に活動を行っている。メンバーそれぞれの得意なことを生かした読み聞かせやおはなし会を心がけている。
- 定期的に「親子読書会」を行っている。モットーは「やる人も聞く人も楽しく！ 大人も子どもも楽しく！」である。「楽しい」を持ち帰っていただけるようにしたいという思いをもって活動している。
- 季節を取り入れるように心がけ、情操豊かに子どもの心を育てたいと考えている。今、子どもたちに届かなくても、大人になってからその思いが届けばと願いながら行っている。



(2) 実演

- ① 人形劇（カンタとおばあちゃん：大友さんと渡辺さん）
 - ・ おばあさんと孫（カンタ）が、方言を交えながら季節の話題などについてお話をします。おばあさんの話から、昔の暮らしぶりが伝わってくるとともに、カンタがおばあさんを大切に思う気持ちが表れている劇である。
- ② 読み聞かせ（科学の絵本：丹治さん）
 - ・ 読み聞かせは、物語だけでなく、科学の本でも有効である。子どもたちが夢中になって聞きながら、身の回りの科学や人や動物の生態や心理等について学ぶことができる。
 - ・ 丹治さんは、今の社会情勢にマッチした本を選んで読み聞かせることが得意である。今回選んだお話は、「人や動物の仕草や行動から気持ちを読み取ることができる」という内容である。コロナ禍で人との関わりを持つことが難しい世の中において、このような内容の本を読み聞かせに選ぶことは意義のあることである。
- ③ 紙芝居（「飴買い幽霊」：渡辺さん）
 - ・ うつくしま未来博において披露したお話。霊山地区に伝わるお話を「サークルおはなしおかあさん」のメンバーで紙芝居化したものである。作画は渡辺さんが担当した。
 - ・ 渡辺さんの方言を交えた情感あふれる語りから、親子の深い愛情が伝わってくる。メッセージ性の強い内容のお話である。



【参加者からの声】

- 具体的な事例発表が参考になりました。コロナ禍の中で、いろいろ工夫されて実践していますね。方言や昔話を取り上げていることについて、その良さが伝わりました。
- 事例発表②は、純粋に楽しかったです！メンバーの方の得意分野を存分に活かした活動であることがよく分かりました。面白かったです！
- お話会（読み聞かせ）を初めて25年になりますが、他のサークルのお話会を見る機会がないので、大変勉強になりました。もっといろいろなグループのお話（読み聞かせ）を聞いてみたいです。

講義・実演

13:00~15:10

「子どもたちにお話の楽しさを」

講師：社会福祉法人芳雄会図書顧問・司書

日本女子大学・清泉女子大学・白百合女子大学・

山梨英和大学非常勤講師

国立青少年教育振興機構絵本専門士養成講座講師

伊藤 明美氏

◎ はじめに

コロナ禍の中で、子どもは臨時休校やコロナ禍の中での授業、友達との関わり方等、大人以上に大変な思いをしている。その中でも子どもたちは日々成長している。子どもたちのためにも、大人も学ぶ機会が必要である。

以前は、浦安市図書館で司書として勤務していた。図書館に勤務している時に力を入れていたことは、普段図書館に足を運ばない方々や子どもたちに対して、どのような取り組みをすればよいかということだった。小学校入学前の子どもたちは親の行動や考え方に左右される。「子どもに本は必要だ」という考え方は、世間一般の常識ではないと感じた。どうして本を読むことが必要なのかということは、世間には伝わりにくい。でも、自分は必要だと実感している。読書活動に取り組んでいる方には、どうして必要なかを伝えられるようにしてほしい。



(1) おはなし ～ストーリーテリング～

- ・ 「おはなし」・・・ 英語では「ストーリーテリング」と言う。アメリカの学校では図書館司書になるために勉強している学生が学んでいる。
- ・ 「読み聞かせ」・・・ 英語では「ブックリーディングサービス（リーディングアラウド）」と言う。
- ・ 「ストーリーテリング」はお話を覚えて、本や文字を見ないで語ることである。
- ・ 昔は地域に伝承の語り手がいたり、祖父母から昔話を聞いたりする機会があったが、最近ではそのような経験ができる機会は少なくなっている。
- ・ 現代の語り手は、自分がテキストで覚えたものを語る形になっている。このような図書館員や地域の語り手が増えている一方で、伝承の語り手は減ってきている。

(2) 子どもとおはなし 昔話とは？

○ 子どもたちは、とても昔話が好きである。創作のお話よりも昔話が好き。

○ 次のうち昔話はどれか？

① ももたろう・・・昔話

(解説) 昔話の特徴は、時代や場所、語られている人物を特定しないことである。そして、お話の最後に結末句で終わる特徴がある。

② きんたろう・・・昔話ではなく伝説。坂田金時という実在の人物の幼少期の話。

(解説) 伝説は、場所や人物を特定しており、「信じてほしいお話」として伝わっている。

③ おやゆびひめ・・・アンデルセンによる創作童話。

(解説) 昔話は書いた人が分からないが、創作童話は作者がいる。

④ いなばの白うさぎ・・・神話

(解説) 昔話は名もない民のことを書いている。神話は神様の話である。

⑤ ねむりひめ・・・グリム童話の中に入っている昔話。

(解説) 日本では「グリム童話」と翻訳されているが、ドイツのグリム兄弟が各地の昔話を集めたもの。

〈昔話に関して〉

- 昔話の特徴は、人物や場所や時代を特定しない、くり返しが多いという特徴がある。
- 昔話は「日本のお話」で、外国のお話は創作童話だと思っている人が多いが、日本だけではなく世界中に昔話がある。
- 昔話は、土地言葉で語られると思われがちだが、そうとも限らない。
- 昔話は、昔話集や絵本の中に入っている話だと思われがちである。
 - 昔話と伝説や神話は混同されがちである。子どもの本には「昔のおはなし」として同じように紹介されているものもある。

(3) 子どもは昔話を聞きたがる

○ 昔話の例として (伊藤先生による「さるむこ」という昔話の実演)

- この昔話をすると、大人と子どもの反応が全然違う。
 - 子どもは、さるには同情しない。しかし、大人は「さるがかわいそう」と思う。
- 昔話は「口承文芸」(口で語られたものが、次の人へまた語られていく)である。
- 子どもは、登場人物にとっても共感し、自分と重ねながら話を聞く。
- 子どもたちは、最終的に「主人公が幸せになるかどうか」を気にしながら話を聞く。
- 特徴の一つは、登場人物が複数いても「一対一」で登場人物が話をしていることである。
- 昔話の中によく出てくる「くり返し」と「一対一」によって、話の内容がより分かりやすいものとなっている。
- 昔話の面白さは、聞く人の人生経験が反映され、一人一人の受け止め方が違うことである。
- もともと昔話には勧善懲悪だけでなく、怠け者やずる賢い者が成功する話もある。
- 昔話は満足する結末が3つある。
 - ①幸せな結婚 ②宝物を見つける(動物なら食べ物) ③身の安全を守る
- 昔話を聞く子どもたちは、自分が社会の中で弱い存在であることが分かっている。でも、昔話の中では弱い立場の人が成功したり、満足したりする結末を迎えている。これは、子どもたちを励ますことになっていると思う。

(4) 昔話は残酷？

○ イギリスの昔話「三匹の子ぶた」 (伊藤先生の実演：『イギリスとアイルランドの昔話』より)

(話の結末)

煙突から鍋の中に落ちたおおかみを、三匹目の子ぶたが食べる。

- 日本の絵本に多い結末(「おおかみは逃げてしまいました」など)とは違う。
- 日本で改編されている絵本は、長男、次男、三男というように、兄弟という言い方をしている。元々のイギリスの昔話は「まず、はじめの子ぶたは、2番目の子ぶたは～」で、一つ的人格が困難を克服して成長する姿を語っていると考えられる。
- 自分の子どもに元のお話の絵本『三びきの子ぶた』(福音館書店)を読んだ母親の話より
 - 子どもは、「こっちのほうが本物だよ」といった。おおかみと子ぶたが命をかけて戦っていたことを正しく理解している。
- 主人公に感情移入している子どもにとっては、「おおかみは逃げてしまいました」では、もう一回おおかみが襲って来るかもしれない、こわい。完全に主人公の身の安全を守るためには、二度と復活しないようにしなければならない。
- 大人は「食べられる」という言葉を残酷だと思うが、元々のお話は、昔話の特徴の一つである、「中身を抜く」(具体的な描写を除く)という表現方法により、残酷さを感じさせないようにしている。元の昔話を変えてしまうのは良くない。



(5) 耳を育てる

- 昔話は「音で聞く」からよい
 - ・ 具体的な絵がある場合・・・ 画家の表現によってある部分がクローズアップされる。
 - ・ 音声のみで聞いた場合・・・ 聞いた人ごとに、想像したことや絵が違ったものになる。
- 昔話を聞く体験は「文字を介さない読書」である
 - ・ 子どもの読書は、字や絵を見ながらというのも大事だが、耳を育てることも大切である。
 - ・ 現代では、耳から聞く情報だけで想像することが難しくなっている。
 - ・ 耳から聞いて想像する力は、とても大切である。耳から聞くと、話をよく聞けるようになる。また、人の気持ちを想像することができるようになる。
- 先生の影響力の大きさ
 - ・ 読み聞かせが始まると静かになる教室・・・担任の先生もお話が好きな傾向にある。
 - ・ いつまでもガヤガヤしている教室・・・先生が教室で丸付けをしていることがある。
 - ・ 担任が読み手に気を遣い、子どもの姿勢を正そうとすると、子どもはきちんとすることに神経がいてしまい、心が上の空になってしまうことがある。
 - ・ ゆれながら集中する子や、お話を集中して聞きながら、相づちを打ったり反応したりしている子もいる。
 - ・ 先生が読み聞かせをするようになると、先生と子どもの関係がより親密になる。
- 国立青少年教育振興機構が中学生や高校生に行った調査結果より
(「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」〔概要〕H25)
 - ・ 小学校低学年期に家族から昔話を聞いたこと経験の多い子どもは、友達の幸せを知ったとき「うれしい」と思う割合が高い。
 - ・ 小学校入学前に絵本を読んだ経験の多い子どもは、「乗り物に乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人に席を譲ろうと思う」と答えた割合が高い。

(6) 子どもたちをおはなしの世界へ

- おはなし会の三要素・・・「物語（おはなし）」「聞き手」「語り手」
 - ・ 3つが重なり合い連携して初めて「おはなし会」が成立する。
 - ・ おはなしを共有する体験ができることで、その場にいる人たちがすごく親密になる。
 - ・ 各自の想像は自由であるが、一つのお話を共有していることがおはなし会のよさである。
- おはなし会は「一期一会」
 - ・ 必ず「初めて聞く」という子もいる。
 - ・ 子どもは語ってくれた人や、その人の声もよく覚えていてる。



(7) 選ぶ・覚える・語る

- おはなしを選ぶには
 - ・ おはなし会では、改編している話ではなく、原作を読んでほしい。語るだけでなく、昔話集などを読むだけでもいい。
 - ・ 昔話の絵本でしか分からないことがある。
(例) 『ちいさなりょうしタギカーク』（エスキモーの昔話）の読み聞かせ
小学校2年生の子が「えっ！ くじらって食べるの？」という反応をした。知らない国の生活習慣を知るきっかけになった。絵本を読む時も、元の話に忠実な話を選ぶとよい。
- おはなしを語れるようになるために
 - ・ 自分が好きなおはなしを選び、声に出して読んでみる。
 - ・ 自分の耳で確かめて何回も何回も練習することをおすすめしている。

- 子どもたちの前で語るときは
 - ・ 「語ってあげるから聞いて」ではなく、子どもに「語らせてもらおう」と思うようにしたい。
 - ・ 子どもたちの成長に大事な瞬間に自分が関わり、聞いてもらう立場でいることが大切。
 - ・ 朝日新聞の「折々の言葉」(R2.9.17)に、掲載されていた文
「お話は、おとなが子どもにおくることができる、いちばんいのちの長い贈りものだと思います。」(東京子ども図書館)
 - ・ 小澤俊夫氏のロングインタビュー「今だから昔話を」(『母の友』福音館書店より)
→ 昔話は、世界中の人々が人生の知恵を後世に伝えるために語ってきたものである。昔話は、コロナ禍の中で起こっている状況を乗り越える、直接的ではなく間接的な力になる。昔話が語り継いできたことは、今、私達大人が子どもたちに伝える義務があると思う。目の前にいる子どもたちに、昔話を聞かせてあげてほしい。



(8) 伊藤明美先生による実演

〔ご披露いただいたお話〕

- ① 「天の庭」(沖永良部島の昔話)
- ② 「りこうなうさぎかもしか」(西アフリカの昔話)
- ③ 「ティザン」(ハイチの昔話)

【参加者からの声】

- 伊藤先生のお話を聞いて、昔話が愛される理由が詳しく分かりました。「三匹のこぶた」など、なんとなく知っているつもりだったものの、話の奥深さについて語っていただきよく分かりました。語りの仕方も勉強になりました。昔話の「オチ」(話の結末のこと)を聞いたときの子どもの反応や感じ方についてお聞きして、よく分かりました。語りを聞くことができて楽しかったです。聞きやすい素敵な声でした。貴重な時間をいただきありがとうございました。
- 伊藤先生のお話をうかがって、昔話のすばらしさを伝えていく大切さを強く感じました。伊藤先生のお話やストーリーテリングは、とても迫力があり、心に残る強さを感じました。
- 伊藤先生に「読み聞かせは、命の流れの贈り物。子どもが折れないように、生きる喜びを伝える。」ということを教えられ、とても良かったです。またぜひ参加したいです。
- 伊藤先生の講義でうかがったことは、一つ一つ大きくなぞりました。現代の大人の勝手な思い込みで話を伝えようとせず、子どもが物事を感じ取る心を信じ、子どもや人の心に向き合いたいと思いました。とても面白かったです。
- 伊藤先生のストーリーテリングはすばらしかったです。福島にも「語り」をしている方がいるので、福島の地元の昔話を発見できればと思います。福島のなまりを使ったおはなしもぜひ子どもたちに伝えていけたらと思います。
- 文字を介さない語りの声で想像していく昔話のよさを改めて感じ、私も取り入れたいと思いました。

◆研修会を終えて◆

- 2つの事例発表が、大変参考になったという声を多数いただきました。読書年間指導計画をもとに学校司書が授業に参画し、図書資料を有効活用している梁川小の事例、地元の方言を交えながら地域に伝わる昔話を披露して下さった「サークルおはなしおかあさん」の実演は、同じ立場で活動している方々にとって、他の学校や団体の活動の様子を知る貴重な機会となりました。
- 講師の伊藤氏から「聴覚のみで話を聞くと言うことが、子どもの想像力や聞く力を高めるためにとても有効である」というお話をいただき、ストーリーテリングや昔話のよさを改めて理解することができました。
昔話には先人の思いや願いが込められており、子どもたちに生きる勇気を伝える力もあります。現代社会は、様々な視覚的な情報にあふれており、人との関わりも希薄になりがちです。参加者は、研修会を通して「現代の子どもたちにとって、昔話を聞く経験が非常に重要である」ということを再確認することができました。